

平成30年11月9日 新山城地域振興計画策定懇話会
第1回全体会 委員ご意見要旨

・発展する地域と少子高齢化が進む地域、光と影といった特徴があり、いわば日本の縮図。育った子どもが成長すれば地域外に出ていく現実を目の当たりにして、シビックプライドの必要性を感じている。

・地域内循環の活性化、相互補完、人材交流も重要。

・山城では、農業も法人化などで活気があり、頑張っている若者もいる。農業で稼げないと若者もついてこないし、やめてしまう。農業発展のためには新規就農で、食べていけるようにすることが課題。

・少子高齢化によって、防災施策は地域福祉そのもの、防災も地域包括ケアの一部と感じている。孤立するとQOLが下がり、福祉的にも防災的にもマイナス要因で、助けるべき人が増えてしまう。

・地域経営（地域内でお金が落ちること）がキーワード

・多様性にはソフトインフラが大事。人がいる前提でつくられた分業、タテワリのシステムが残っているが、こうした壁を壊し他者を受け入れることを進めることが必要。

・トライアンドエラーを気兼ねなくできる地域であれば人が集まるきっかけになる。

・オンライン講座の活用や、ICTはアクセス機会を拡大できる。

・地域ごとの個性を出しつつ、京都市や阪神・中京圏とのネットワーク構築により、新たな発展に繋がる。観光宿泊も京都市で全ては受けられない。

・誘致した新しい企業とのネットワーク構築により、既存企業の活性化に繋がる。

・今ある強みを活かす、域内循環を促進すること、人手不足への対応が課題である。

・人口急増する阪急洛西口駅付近では、保育所が不足している。やはり乙訓は山城地域の中では異色という感覚。

・現行計画は、高齢化についての記載が薄いと感じている。50～60代に介護離職が増えており介護を終えてからの再就職は難しい。

・日本は家族主義で、その発想から離れ、保育所ではなく、地域で助け合う仕組みづくりを再構築していくことが必要。

・将来像については、前向きなキーワードが並ぶ中、人口減により存続が懸念される地域もあり、地域の持続性や将来を見据えた文言（「未来に希望が持てる」というのがこれに当たるのかも）や、地域の歴史を踏まえた文言も必要。

・他の地域がうらやまむほどのこのポテンシャルを活かす施策が必要であるが、たとえば学研都市の世界最先端施設で得られるものが地域内に活かされてない。AI・IoTのような手法を実装し、最先端の地域づくりに活かすことなど考えられるのか。

・多様な地域資源を保存するだけでなく、つなぐ仕掛けづくりが重要。地域に一体感がなく、ダイバーシティ(子育て、多文化共生、外国人就労)を前面に押し出して、地域をまとめ上げていくことが必要。

・ハード整備は進むが、ソフトインフラが弱く、情報やデータが活かし切れていない。地域包括ケアにおいても、情報の壁があり、持っている情報を全く活用できていない。情報をつなぐネットワークづくりを進めることで、関係性ができる。

・学生など若い世代も実は地域に愛着を持っており、これからの世代にも魅力が伝わるメッセージを計画に大きく入れてほしい。

・便利になっても、バキューム効果でむしろ人口が減少する。「『ここで暮らしたい』という地域の魅力を高める」ことが重要であり、トライアンドエラー、リスタートアップしやすい地域であるというイメージづくりなど、地域の輝きを増すしかけができないか。

・教育をどう考えるかがもっと入っていてもいいと思う。スポーツは、子供向けだけではなく、生涯学習でもある。分かち合い、「シェア」という発想をとり入れてはどうか。

・人の流れが生まれることで地域を変えたいと考えている。雇用が創出され、地元の野菜が売れ、今までなかった利益を享受するしくみができることで、単におカネが入るということではなく、その結果として高齢者がいきいきとするなど、真の意味での地域活性化につながる。

・相楽東部でアクティビティスポーツに取り組まれているが、誰が主体になるかが一番の問題で、基盤をどうつくっていくかが課題である。

・地元の農家が農作業に充てるべき日中の時間に自力で運ぶ事と物流に課題があり、農業振興には物流の視点も必要。